

社会委員会通信

17

2004.9.5

発行：横浜港南台教会 社会委員会

〒234-0054

横浜市港南区港南台 7-8-29

Tel : 045-833-5323 Fax : 045-833-6616

8月1日(日)の平和聖日は、小平学園教会の宗像基牧師をお招きし、「なぜこんなことに？」と題した講演が行われました。詳細は本誌をお読みいただきたいと思います。私たちが日々の教会生活の中であまり深く認識していなかった事柄を丁寧に論じられた講演でありました。私たち(教会・キリスト教界)が意識的にか、無意識的にか、考えたり判断したりすることを避けてきた問題について、宗像牧師はあえてそこに焦点をあて、お話をしました。これは私たちの信仰の在り方も問われるものでありましたが、聖書の語るメッセージ、イエスの福音を新たに受け止めることができたと思います。有意義な講演が与えられたことに感謝するとともに、私たちのために、ご準備とご講演をしてくださった宗像先生に心から感謝いたします。参加者は61名(女性38名・男性23名)でした。(社会委員長：秋吉 和史)

平和学習会 講演要旨：「なぜこんなことに？」

講師：宗像 基

(小平学園教会牧師、個人誌『バベル』発行人)

1. ミッションの歴史において犯した罪、その謝罪と反省

キリスト教はひどいことをしてきたということを改めて感じます。私たちは“平和”と言うと、世界のいろいろな問題を取り上げて、あれもいかにこれもいかに言うけれども、その前に「じゃ、おまえは何をしてきたのだ」ということに対して、自分のほうから反省、謝罪し、そこから出発し直さなければならないのではないかと私は考えております。

よくキリスト教はいろいろな迫害を受けたと言うけれども、迫害を受けたよりもキリスト教が迫害したほうが多いですね。なぜそうなったのかということをよく考えていただきたいと思うのです。特にミッションの歴史においては、私のいたブラジルもそうですけれども、バスコ・ダ・ガマが来た。ミッションの宣教師は十字架と鉄砲と算盤の三つを三位一体として押し寄せてくるのです。それでキリスト教になるやつはいいけれども、キリスト教にならないやつはいくら殺しても構わない。本当にたくさんの人がそれで殺された。そのことを私たちは忘れてはならないと思います。マゼランにしてもバスコ・ダ・ガマにしても、十字架と鉄砲と算盤の三位一体的な力で押し寄せ、多くの先住民たちを殺してきた。キリスト教に改宗しないやつを殺しても、それを当たり前として正当化してきた。

有名なアウグスティヌスも「キリスト教に改宗しないやつはどうなっても知らん。それはや

つつけてもいい」とははっきり言っています。殺してもいいとは書いてないけれど、十字軍も全部それによって正当化されているのです。キリスト教にはそういう歴史があったということを私たちは忘れてはならないと思います。それと同時にクリスチャン同士の血みどろの争い。黙示録にある命の書に自分の名前が記されているか記されていないかは大変な問題で、それをめぐって大変な争いがあった。そういうことも歴史では非常にはっきりしております。そういうことをまず謝罪しなくてははいけない。この前、カトリックがユダヤ人に謝罪しました。「カトリックはユダヤ人を迫害してきた」と。しかしその時、ローマ法王は「ある教会はひどいことをやった。そのことに対しては謝罪する」と言いました。「カトリックは」と言っておりません。もちろん謝罪は必要です。けれども謝罪より必要なものは「なぜそんなことになったのか？」という原因の究明です。

日本の歴史もそうです。この前の戦争をめぐっていろいろなことが言われます。政府としても一応、「中国や朝鮮に対して非常に悪いことをした、遺憾だ」と。そういう謝罪をする気持ちまでは持っているのですけれども、なぜそういうことになったのかを、彼らは全然考えようとはしていないのです。「なぜ」を考えてはいけません。「なぜ」を考えることはタブーなんです。「なぜ」を追求していくと、必ず天皇制、天皇の戦争責任にぶつかるからです。だから「なぜ」は追求しないことになっているのです。一つの大きな問題は「上官の命令は朕の命令と心得よ」というあの言葉です。あの言葉がすべてを支配したのです。こういうタブーがあるから、「なぜ」は言わないのです。やったことは認める。けれども「なぜ」は言わない。

近ごろは、やったことも認めないというのがたくさん出てきました。そういう勢力がどんどん増えてきました。やったことも認めない。これは情けないことだと思いますけれども、残念ながらキリスト教の中にもそういうタブーが生きています。「なぜ」は問わない。やったことは認める、だけど「なぜ」を言うと、問題がある。今は引退しましたがけれども、キリスト教会の有名な説教者・神学者が講演したあとに、私は「先生、なぜ教会はこんなひどいことをやってきたのですか？」と聞きました。彼は「なぜか知らん。私はワイツゼッカーを訳したんだ」なんて威張っていました。「なぜ」を問いたくないのです。なんでキリスト教はこんなとんでもないことをしたのでしょうか？

タブーの一つがブッシュの掲げている考え方で、特に今彼を支えているネオコン、キリスト教原理主義です。そういうことを問うことは一切タブーです。「われわれは決して間違ったことをしていない」と考えますから、「なぜ」を問うことはタブーです。それから、いわゆる正統主義的と言われるキリスト教にもタブーが生きています。なぜそうなったのかということは、なかなかキリスト教の本にも出てきません。

最近、土井健司（玉川大学助教授）著『キリスト教を問い直す』という本が出ました。ここには十字軍をはじめ、キリスト教の名の下に犯された戦争、残虐行為などがはっきり書いてあります。しかし「それらはキリスト教徒の犯した罪であって、キリスト教が犯したものではありません」と弁明しているのです。確かにその通りだと思いますけれども、犯したキリスト教徒たちはどのようにキリスト教を信じ、どのようにキリスト教を解釈していたのか？あるいは「自分たちのしていることは誤りだ。本当はキリスト教はこんなことを言っていないけれど、われわれが馬鹿だからこういうことをやっているんだ」と思いながらやったのでしょうか？そうではないのです。「これはキリスト教の正しい行為」だと思ってやっているのです。だから、

キリスト教の犯した罪ではなくて、キリスト教徒の犯した罪だと分けて、それをごまかしてしまうことは、やはり間違いだと思います。キリスト教の中にはそういう聖書解釈があった。そういう解釈が正統的にずっと続けられてきたということに問題があるのではないかと私は考えます。そしてキリスト教の神学そのもの、聖書解釈、あるいはキリスト教の理解をもう一度本気で問い直さなければならぬのではないかと考えるわけです。



2.なぜこのような罪を犯したのか。犯し続けるのか。

神学の問題、特に「救い」の問題

「キリスト教を信じなければ救われぬ。信じない人間は生きていく値打ちがない。その連中は滅びだ」という神学は、現在も生きています。伝道のモチーフにもなり、伝道のエネルギーにもなっているのです。あの人たちは滅びるから、かわいそうだから伝道してあげようというエネルギーです。

最近送られてきたキリスト教のパンフレットに、「まだ日本のクリスチャンは1%にも達していません。99%以上の人々が滅びの道に迷っているのです。だから伝道しましょう」と書いてあります。これが大体今までの伝道のモチーフであり、伝道のエネルギーであったわけです。そうなのでしょうか？例えば、大伝道者がサッカー場に1万人も集めて「悔い改める人、前にいらっしゃい」と言って、千人ぐらい来たとする。すると「千人が救われた、素晴らしい」と言うけれど、あとの9千人は全部滅びです。と言うのは、1回聞いたからもう駄目なんです。聞かなかつたらまだいいのですけれど、聞いたやつはもう弁解のしようがないのです。となると、「本当におまえは救われる人を作っているのか、それとも滅びる人間を作っているのか？」とさえ言いたくなります。「一度聞いたら駄目なものなら、言わないほうがいい。聞かさないほうがいい。そうしたら救われるかもしれない」という論理まで成り立つわけです。伝道が「あいつらは滅びるんだから、かわいそうだから救ってやろう」という考え方に立っているとすれば、それはおかしいと私は思います。隣近所で仲良く生活していても、最後に「私救われる人、キリスト教を信じないあなたは滅びる人」というのでは差別です。こうした最終的差別を私たちが温存しているならば、本当の共存にはなり得ません。

あるカトリックの神父さんが現在の三つの暴力を言いました。武力による暴力、経済による暴力、差別による暴力。これは本当にその通りですが、私はその神父に「最後にもう一つ、宗教的暴力はどう思いますか？最後の審判で地獄へ突き落とすという暴力を私たちが持っているとするならば、これはあなたにとってどうなのでしょう？」と聞いたら、彼は答えませんでした。でも、われわれキリスト教信者は皆それを持っているんです。いくら仲良くしても「最後に私は救われる、あなたは滅びる。かわいそうに」となってしまうんです。

聖書は創世記以来、神の無条件の恵みを説いているのです。とかく原罪論のほうが強く出てきますけれども、むしろ一貫して流れているのは原祝福論です。これが音楽で言う通底音のように、聖書を一貫して流れている響きだと思います。原祝福論、すなわちこの世のすべてが支えられ、すべての人のためにイエスは十字架にかかった。神様はすべてのものを造られて「よし」とされた。パウロは「アダムの違反がすべての人に死をもたらせたとするなら、イエスの

義なる行為が当然すべての人に命を与えるに決まっているのではないか。それを信仰のある人間しか救われないなどどうして言えるのか」、「イエスは不信心な者のためにも死に、彼らを不信心なままで義とする方だ」と言っています。アダムの違反がすべての人に死を及ぼしたとするならば、キリストの義がただ信じる人にしか救いを与えることができなくて、あとはほろぼすというのでは、あまりにもアンバランスでしょう？ キリストの恵みによって、不信心の者さえも義とする神なのだということをパウロは主張しているわけです。

もう一つ考えてほしいのは、十字架の上でイエスは自分を殺そうとしているすべての人に対して「父よ、彼らを赦してください。彼らはなすべきことが分からないのです」と言っているでしょう。それをわれわれキリスト教会は、みんなイエスのメリットにしてしまったのです。「イエス様は素晴らしい。十字架で殺されながら、まだみんなのためにお祈りをしている。何と素晴らしい方だろう」と言って、イエスのメリット、イエスを賛美する材料にはしたけれども、教会は決してイエスを殺した人を赦してはいないのです。イエスが「赦してください」と言っているのだから、全部赦さなければならぬはず。旧讃美歌 350 番に、「恥をいとわず悩みをしのび、仇なす身をも恵みたまえば」とあります。「そんな素晴らしい方だから、私たちは賛美するのだ。しかし、イエス様がそう祈ったからと言って、私たちは赦す必要はない」と言って、教会は赦していないのです。ここに根本的な出発点の誤りがあると私は思います。

遠藤周作の『沈黙』がそうでしょうか？ 最後にあの神父さんがイエスの像を踏みます。あの時にイエスの像は「踏むがいい」と。そこでは実際に百姓たちが逆さ吊りにされて、血がポタポタ流れている。「もしおまえがこの像を踏むならば、あれを赦してやろう。踏まなければ、あの人たちは永久にあのままだ」と言われて彼は悩むのですけれども、その時にイエスが「踏むがいい、踏むがいい。私は踏まれるために来たのではないか」と言われて、彼は踏むわけです。そうした途端に彼は転びキリシタンとしてカトリック教会から除名されます。彼のした素晴らしい行為に対しては評価するかもしれないけれども、彼自身は除名されてしまう。一番の問題は、イエス様が「彼らを赦してやってください」と言っているのに教会は赦さなかったということ、ここにわれわれの出発点の誤りがあるのではないだろうかと考えます。

神様の愛は「抱擁無限」です。イエスの十字架はまさに「抱擁無限」です。「あいつは駄目だ、こいつも駄目だ。俺を信じる人だけ抱いてやる」というのではない。すべての人、一人ひとりに対してイエスは抱擁無限。これが何よりもキリストのメッセージ、福音のメッセージそのものではないかと思います。となれば、あの人たちは滅びる人間だとか、あんなやつはクリスチャンにならないのだから殺してもいいとか、そんなことは絶対出てこなかったはず。ところがそれが出てきたということは、やはりキリスト教の非常にエゴイスティックな考え方、「あの連中は殺したって構わない」という神学の大きな誤り、これが今もなお根強く残っている。このことに対して皆さんはどうお考えになるのでしょうか？

ルーテル教会が出している『伝道を考える』というパンフレットがあります。この中に「蛍光灯は発電所の電線で繋がっている時だけ蛍光灯としての存在価値がある。発電所と繋がらないで天井にくっつけられているだけなら、かえって天井の美観を損ない、邪魔である。そのような蛍光灯はないほうがいい。人間は神様と信仰によって繋がっている時だけ人間としての価値がある。神様と繋がらないでこの世に生息しているだけなら、かえって神様の造られた世界

を汚すだけで邪魔である。そのような人間はいないほうがいい。ここで大事なことは神様と繋がらない人間はいないほうがいいと明確に言い切ることである。いや、いてはいけない存在であるという明確な認識を持つことである」と書かれています。ひどいですね。この問題をめぐって、私はあるルーテル教会の神学者と随分議論しましたが、駄目でした。ルーテル教会ではこれを正当な文書として受け取ってしまいました。けれど私は違うと思う。彼らは「あの滅びる人間のために助けるんだということをエネルギーにしよう」と言っているのだけれども、その人たちを「おまえたちはいないほうがいいんだ」と言ってしまうことに対して、私は我慢ならない。「神様と繋がらない人間はいないほうがいい。明確に言い切ることが大事だ」と言っていることは納得できない。

「私たちはスイッチのついていない蛍光灯も蛍光灯と呼ぶように、神様と繋がっていない人間もつい人間と呼んでしまう。よく言えますね。「イエス様はその間違いに気づかせてくださった」と。本当ですか？「人間ではない人間が、神様の働きによって人間に回復される。これがキリスト教の福音であり、これが伝道である。神様は、人間でない人間を一人残らず人間に回復しようと、ありとあらゆる努力をされている。この神様の努力に仕えること、これがキリスト教信仰で言う伝道である。・・・神様に繋がらない人間は人間と呼ばない。けれどもそれを人間にしてやる働きがわれわれの伝道なのだ」と言われるなら、そういう伝道には与りたくないと思います。これが「なぜ」の神学そのものの問題、すなわち本当に「抱擁無限」の神学に立つのか、それとも最後に「やっぱりおまえは駄目だ」という条件がついているのか、今のキリスト教会はどうなんだろうかということをお願い直していただきたいと思います。

「聖」の問題

「聖」とは、聖書辞典を見ると「不義や汚れから隔絶され、それらを排除し、自らを浄しとする働き、状態」と書いてあります。それは人間関係のことではなく、神との関係、神との隔絶性、神の尊厳性、超越性を言うのだとされてきたけれども、それは必然的に神殿や祭司、律法学者など神に関わる人間と一般の人間を差別することになります。それはある人々に罪人のレッテルを貼って、異邦人の差別を生んできたことは明らかです。しかし「聖」とは他を排除し、分離し、己の浄さを言うのではなくて、すべてを愛し、すべてを受容するということであると私は言いたい。

少なくともイエスの説いた神は、「すべて重荷を負って苦労している者は私のもとに来なさい。あなた方を休ませてあげよう」という神であり、「神はその独り子を賜ったほどにこの世を愛され、それは神の真実によって一人も滅びないで永遠の命を得るためである」(ヨハネ3:16)。聖書には「そのイエスを信じる者が一人も滅びないで」と書いてあります。だから信じなければ駄目なんだということになるわけですが、それは違います。神の真実です。神の恵みの真実によって一人も滅びないのです。われわれの信仰の真実ではありません。神の真実によって、一人も滅びないですべての人が救われるためです。これが、神様がこの世を愛し抜いた、徹底的に愛したということなんです。日本語だと「神は」と「この世を愛された」の間に「その独り子を賜うほどに」と入るので「神がこの世を愛した」という印象がすごく弱いのです。ところが英語でもギリシャ語でもそうですが、私のいたブラジルでも「デウス アモウ オ ムンド(神様はこの世を愛された)」と始めにバーンと来るわけです。その方法として「独り子を

賜うほどに」となるわけです。だから「その独り子を賜うほどに」よりもむしろ「神はこの世を愛された」というほうが強いのです。神様は本気でこの世を愛しているのだということ、そして神様の真実がすべての人を救うためにあるのだということ。この神は愛において全能だということを忘れないでほしい。「聖」ということは決して分離や排除ではなくて、まさに抱擁であり、すべてのものを受容することなのだと思います。

使徒信条に「死にて葬られ、陰府にくだり」とありますけれども、それはイエスの愛が陰府のどん底にまで届いていますよ、ということなのです。「そこまでイエスは降りてきている。それでも救われない人間がいると言うのですか」というふうに解釈すべきだと私は思います。

「聖」は英語で holy です。この言葉は、whole(全部)というのが語源だとある人が言っていました。だから「すべて」が holy なのだ。だからあるものを分離したり、あるものを汚れとして「聖」を作るのではない。すべてのものを受容するということは、神様にしかできないが、すべてのものを受容するということ、これが「聖」なのです。

パウロは、この「汚れ」とか「浄さ」というものの差別を乗り越えようとして、すべての人は同じ罪人であると言ったのです。ある人々をより聖なるもの、ある人たちをより浄いもの、汚れたものと分けることに対して「そうではない。全部罪人なのだ」と言ったのです。ところがそう言いながら、キリスト教会は「浄さ」と「汚れ」を創ってきました。そしてその中で平気で差別をしてきたわけです。「聖」というものをより聖にしよう、より高めようと思うから、あるものを汚れとして分離しなければならなくなるのです。けれども、「聖」というものの元々の考え方は、すべてのものを受け入れる、どこまで私たちはすべての人を受け入れることができるかという問題です。これが私たちに問われている「聖」の問題ではないでしょうか？

ある人が言っています。「元祖師たちは、浄穢の観念を超えんがために浄穢を説いた。然るに宗門の歴史は浄穢を分かつために浄穢を説いてきた」と。元々の教祖は浄穢の差別をなくすために浄穢の問題を説いたのに、後の連中は浄穢を分かつために浄穢を説き出したのです。これは本当にその通りだと思います。

キリスト教の歴史も同じことです。神をより「聖」とするために浄めと汚れを創り出してきました。そして御名を崇めるためと称して、聖なる神をわれわれは分離と排除の神にしてしまった。もちろんそれだけでは神の愛、神の受容を語ることはできません。そこで神の受容をより大きくするために何をしたか？「浄さ」と「汚れ」の落差を大きくすることによって、それでもなお神様はその汚れをも全部救ってくださるということによって神の愛の広さ、神の愛の高さを強調しようとしたのです。

残念ながらそれが今までの神学の大体のやり方です。特に日本の神学では、語弊があるかもしれませんが、私の先生の北森嘉蔵先生の『神の痛みの神学』などに出てくる考え方は、まず人間をことごとく反価値的な存在、汚れの存在、全然値打ちのないものとして、そういう人間さえも救ってくださる神様の愛の素晴らしさと、そういう人間さえも救わなければならないという神の傷み、それが分かることが信仰なのだということです。となると、人間を貶めなければ神の愛は分からないことになります。

例えば、マタイ福音書の最初に出てくるイエスの系図。4人の女性が出てきます。この4人の女性のことを彼は「彼女たちは札付きの女だ」と言うのです。「その札付きの女でさえも救ってくださる神様は何と素晴らしいのだろう」と言うことによって、神の愛の広さを強調しよ

うとしている。けれど元々神様が「おまえたちは札付きの女だ」と言うとしたら、その神様こそ問題でしょう。「おまえたちは汚れた女だ。けれども私は救ってやる」なんて冗談じゃない。汚れた女と言うこと自体が問題です。それを札付きの女と言いながら、その反価値的な女を救ってくださったのは神の愛なのだとして解釈することによって、神の愛の深さを表そうとする。そうではないのです。あの女の人はイエス・キリストの誕生に繋がる、実に重要な働きをした人物だと聖書は始めから書いているのです。それを言わないで、いわゆる反価値的な、汚れた女たちを神様が救ってくださったということは、その出発点においてその女性たちを差別していることになります。

神の受容の価値を高めるために人間を貶めるという考え方を「にもかかわらず神学」と言うのです。何でも「にもかかわらず」をつけてしまう。「彼はそんなにひどい人間にもかかわらず、神様が救って・・・」と。こうした神学を私は「落差神学」とも言っているのですが、落差を大きくすることによって神の愛を強調しようとする。そのために人間はより貶められる、あるいはみんな自分をも貶めます。

マルチン・ルターは「自分はウジ虫袋だ」と言いました。自分をウジ虫袋と言うまでに自己卑下したから、神様に救われる値打ちがあるのだということです。自分をウジ虫袋だと考えないやつは救われない。そこまで自分の罪が分からない人間は、救われる値打ちがないということになってしまいやすいのです。自分を貶めることが自分の救いの条件だと考えたら、それは大間違いです。このような私でさえも救ってくれるなら、救われない人間がいるはずがないのではないかと言うなら正しいです。

「落差」を大きくすることによって自分の愛や神様の愛を示そうとする考え方も間違いです。賀川豊彦は優れた才能と資質を持った人です。ただ、彼の書いたものを読んでみると、問題がある。彼は神戸の新川に行って、そこに住んでいる部落の人たちや在日朝鮮の人たちを本当に愛しているのです。けれど、どういうふうに愛しているかと言うと、彼のあとで書いた文章を読んでみると、特にその女性たちに関して「あんなのにはもう子供を産む資格なんか無い。あんなのに子供を産ませていたら日本民族は滅びてしまう。だからあんな女にはX光線を5時間ぐらい当てて卵を全部殺してしまったらいい」と平気で書いているのです。相手がひどければひどいほど彼は愛するのです。自分の愛を高めるためには、相手をひどくしなくてはならないのです。相手をひどい状況に置いて、それを私はなおも愛しているんですよ、と言わなくてはならない。そうでなければ自分の愛が大きくなるのです。これは危険な誘惑です。私が愛している人がどんなにひどい人かということを考えて、それでも私は愛しているのだ、何と私は素晴らしいのだろう、ということになってしまふ。そういうふうに女の人たちを見ること自体が差別なんです。本当は愛していないのです。けれども彼は本気で愛している。そこに彼の愛の矛盾があるわけです。私たちキリスト教は本当に注意しなくてはならない。「落差」によって愛を量ろうとする考え方、これは私たちにとって非常に危険な誘惑であるということです。

人間というのは、聖書に書いてありますけれども、自分を愛するようにしか隣人を愛していないのです。だから、自分をどこまで愛しているかということが、自分が隣人をどこまで愛しているかという問題になるのです。自分への愛が間違っていれば、隣人の愛し方も間違ふのです。だから、自分の愛を言葉だけで酔ってしまうのではなくて、その愛がどういう意味を持っ

ているのかということを実際に考える訓練をしていただきたいと思います。それは神の無条件の愛に対する実存的な応答であって、他を排除するものであってはならないのです。

神様もそうです。私にとってかけがえのない、これがエハド、いわゆる唯一の神ということなのです。それを数量的な概念にしてしまって、もうそれしか神様はいないんだということになってしまうから、キリスト教は今問題になっています。多神教のほうが良いということになってしまうのです。日本は多神教だけれども、その日本が何をやってきたか、また天皇制というものが何をしてきたか、それだけ考えても、多神教が良いなんて決して言えないと思います。

最近ある神学校の先生が講演で、「日本の伝道が今奮わないのは『神のみを神とする』ということに対する信仰が足りないからだ。『神のみを神とせよ』ということのをわれわれはもっとしっかり言わなくてはならない」と言っていました。「戦後のキリスト教の伝道はイデオロギーが先行してしまって、神のみを神とするという思想が弱かった。そういう覚悟がないから駄目なんだ」と言うのです。私はあとで質問しました。「では戦争中はどうだったんですか？」と。「戦争中は天皇制にすっかり屈服してしまって、神のみを神としたとは思えませんけれど、それに対してはどういう評価をされるのですか？」と言ったら、彼は「あれは大日本帝国憲法下だからしょうがなかった」と。「神のみを神とせよ」ということは非常に素晴らしい言葉ですけれども、かけがえのない神様だという考えでなくて、これこそ神様で、ほかは全部偶像で全部排除しなくてはならないという考え方になったとしたら、とんでもない間違いだと私は思います。

イエスを抜きにした神学

ブッシュがやたらに神の名を持ち出して自分の侵略を正当化しますけれども、彼はイエスの名を持ち出すことはしないのです。同志社大学の森孝一先生が『ブッシュの頭の中身』という本を書いています。その中で「彼がイエスの名を持ち出さないのは、ユダヤ教に対する兼ね合いだ」と言っています。彼はユダヤ人にサポートされていますから、「あまりイエス、イエスと言うと、仲が悪くなったら困るので、神という名前しか持ち出さないのだろう」と言うのです。

しかし、ブッシュもテキサス州の州知事の頃、「イエスの日」を作ろうとしたことがあります。その日には全テキサス州がイエスに対する特別な礼拝をすると言ったようです。それでピリー・グラハムが驚いてしまった。彼がブッシュを支えてきたキリスト教の指導者なのですが、その彼さえも驚いてしまって、そこまでやってはいけないと、あわててそれを取り下げさせたという話があります。

そのように、かつて彼もイエスの名前を持ち出したことがあるのです。しかし今の彼は絶対イエスの名前を持ち出しません。イエスの名前を持ち出すと、あのイエスに縛られてしまうのです。あのイエスとは福音書のイエスです。もうこれは一つ枠が決まっています。いくらそこからはみ出して解釈しようとしても、そうむちゃくちゃにできません。しかし神様という名は、残念ながらいくらでもどうにでも使えるのです。自分を正当化するために、いくらでも神様の名前を持ち出せる。特に旧約聖書からいくらでも持ち出せるのです。だからブッシュは盛んに神様の名前を持ち出すのです。

私たちはイエスの名をもっと回復しなくてはならないと思います。イエスの名前は、あの福音書のイエス以外にはあまりはみ出ることができないからです。イエスを失ったキリスト教はどうなるか。やたらにキリスト教の支配とか、神の支配とか、勝利とか、君臨する等の言葉を使いたがります。讚美歌の中にも盛んに出てきます。イエスの名前を持ち出さないと、私たちはとかくそういう言葉を使いたがるのです。

「メサイア」という歌があります。あのハレルヤの前がどういう歌か知っていますか？ そのずっと前に「伝道者の美しき足は」という歌があります。素晴らしいメロディーで「神様の福音を伝える人の足は何と素晴らしく美しいのだろう」という詞が出てきます。ところがその次に「その伝道者の言葉、福音を信じないやつはどうなるか」と出てくるのです。そしてそういう連中はみんなたたき壊してしまって「勝った！ハレルヤ」です。残念ながら歌の組み立てはそうなっているのです。勝利とか、君臨するとか、支配するとか、そういう言葉にわれわれは喜びを感じないほうがいいと思います。そういう気持ちを持つことも時には必要だと思えますが、あまりキリスト教はそういう言葉に酔っていただきたくない。むしろキリスト教徒が、あのイザヤ書 53 章にあるように、「本当に自ら辱めを受けて」と言うところ、それがハレルヤなのです。「勝った、勝った！」ではないのです。「あいつらをみんなぶっ殺しちゃった、ハレルヤ」ではないのです。そういう考え方を持っていたいただきたいと思います。

聖書解釈の問題（アナニヤとサツピラの物語）

問題と思われる聖書解釈の具体例を挙げるならば、使徒行伝のアナニヤとサツピラの物語です。これをどう解釈するのかということが、聖書解釈の非常に大きな決め手です。私の書いた『聖霊に禁じられて』という本の中に書いてありますから、ぜひ読んでいただきたい。

日本の救世軍を創設した山室軍平は、社会問題や弱い人たちのために戦った人だから、きつと彼らしい解釈をしているだろうと思って読んでみたら、そうではないのです。彼はアナニヤとサツピラが殺されたことには万々歳なのです。「こんなやつがいるから、教会は駄目になるんだ。うそをついて自分の財産を隠して・・・なんていうやつは殺されて当たり前だ」。そうでしょうか？ 私は、初代教会はカルトすれすれのところまで行ったと思います。もちろんペトロは一生懸命それを食い止めようとしているのですけれども、もうカルトに酔った連中は目をギラギラさせて、ちょっとでもうそをついた連中は赦さないとにらんでいる。気の弱いアナニヤとサツピラはそこで倒れて死んでしまった。それをみんな平気で担ぎ出した。教会中を「恐れ」が支配したと書いてある。「恐れ」が支配する教会、これは駄目です。

アナニヤとサツピラの物語は、初代教会が危うくカルトになってしまうところでした。無理もなかったと思います。ペトロが一生懸命食い止めようとしながら止めることができなかった。だから2人共殺されてしまった。そしてそれを当然のこととした。それで「恐れ」が支配した。これは危険です。こういうところをどう解釈するか。こういうテキストをどう解釈するか。これが聖書解釈の非常に大きな分かれ目になるだろうと私は思っています。

キルケゴールが言っています。ある牧師がイサクの奉献の物語を神様に対する絶大な信頼だと話した。そうしたら信者が走ってきて「先生、庭で信者が息子を殺そうとしている」「どうして？」「だって今日あなたが言ったじゃないか」。確かに牧師が「これほど立派な信仰はない」と言ったのです。その信者はそれを丸ごと信じて、息子を殺そうとした。牧師は飛んで行って

「いや、私はそんなことを言ったのではない」と言うのだけれども、その牧師がそういうことを言ったことは間違いです。アナニヤとサツピラの物語もそうです。うそをついた人間は殺されて当たり前とか、昔だからしょうがなかったとか。昔だからしょうがなかったと言うなら、今だったらどうなのだということをちゃんとつけ加えなければいけません。

3.伝道の姿勢の転換

賛美について

まず「賛美」の問題です。賛美が過剰になってはいけません。まるでイエス様が「俺を賛美しろよ」と言わんばかりの賛美がなされているとすれば、イエス様は迷惑でしょうね。イエス様に向かってやたらに賛美して「イエス様、これで喜んでいただけますね」なんて言ったら、とんでもないです。

皆さんはドストエフスキーの『大審問官』を知っていると思います。中世期の大審問官と言えば宗教裁判の一番のかしらです。そのかしらが部下を引き連れて町を歩いている時、年をとった人が病氣の人を癒していると聞いた大審問官は、「あれはイエスだ」とピンとくるのです。そして捕まえてきて牢屋にぶち込む。それで夜こっそりとその大審問官は自分一人だけで彼の所に行く。「おまえが誰か分かっている。おまえはイエスだ。なぜ今ごろ出てきたのだ。俺はおまえのためにこれだけの教会を造り、おまえのためにこれだけ讃美歌を歌い、おまえのためにこれだけの人々に献金をさせた。すべておまえのためにやっている。私が指一本動かしたら、世界中の人間はみんなひざを屈めておまえを賛美するだろう。それで何が不満なのだ。その老人は黙っている。まさにこういう光景になる危険があります。賛美してやっているからいいじゃないか、喜んでくれるはずだと思っている。その老人イエスは、黙って大審問官に接吻をして、その場を去って行った。これはドストエフスキーの名場面です。

本当に賛美は行き過ぎてはいけないと思います。賛美したからそれで済むと思ったら大間違い。マルコ福音書の1章にも3章にも5章にもみんな書いてあります。まず1章では会堂で悪霊に取りつかれた人間が、イエスに向かって「聖なるイエス、聖なる者よ、聖なる神の子よ」と言っている。しかし「私と何のかかわりがあるのか」と言っているでしょう。「私はおまえを賛美してやるけれど、私はあなたと何のかかわりもない」と。5章では、墓場に鎖でつながれた男が「いと高き神の子イエス」と最大級の賛美をしています。それで「おまえは私と何の関係があるのか」と言っています。

賛美というのは限界があります。私はキリスト教会が賛美集団にはなってほしくない。

「私は一生懸命人間を愛しようとして人間のためにやっているのに、おまえたちは私の方しか向いていないではないか。私に向かってペコペコ賛美しているだけだ。どうしておまえは人間の方を向かないのだ」と言われますよ。これが今の教会が下手をすると賛美集団になってしまうという危険ではないかと思えます。

「日本伝道会」というのができました。趣意書に「今まで言われてきた人間の自由と平等とは、本来は神の下での自由と平等であり、自由と平等が神を崇めるためにこそあったものを、人間のための自由と平等にしてしまったことが本来的な間違いだ」と書いてあります。私はこれに対して反論しましたが、返事がありません。これを見ると、神様もキリストも賛美された

くしょうがないんですね。

隣人との関係

今までは神の恵みばかりを感謝する、神を賛美することばかりに夢中になってしまって、隣人のことが忘れられているのです。聖書の中には隣人のことがたくさん書いてあるのに、隣人のことが忘れられてしまっている。例えばコルバンの例え話。マルコの7章に書いてありますが、お父さんお母さんに贈り物をしようと思ったけれども、父母にあげなくても神様に捧げればそれでいいのだと、父母は放ったらかしにされる。イエス様は「それでいいのか」と言っているわけです。

アメリカ先住民について書かれた『インディアン悲史』という本があります。ピューリタンの連中がアメリカに入って行って、最初は大変な目に遭うけれども、インディアンの人たちがみんな助けてくれる。けれども作物ができなかつたり、バタバタと死んでしまったりする。インディアンたちが一生懸命に世話をしてくれて、やっと苦境を乗り越え、ようやく収穫感謝祭をやるようになった。ところが彼らがやったことは、神様に感謝することだけだったのです。インディアンたちに全然感謝していないのです。だから、その次にはインディアンを殺すことになります。インディアン大虐殺が始まるのです。皆さん、神様に感謝する前に隣人に感謝しなければいけないのです。マタイの最初に書いてあるでしょう。「あなたが神様に捧げものをしようとしたときに、まだあいつと仲直りをしていないことを思い出したならば、供え物をそこに置いてまずその人と仲直りをしてから来なさい」と。

面白いことに、この言葉をほとんどの礼拝論と称する本の中では取り上げていないのです。ところが、これなしの礼拝論というのはみんなインチキだと私は思っています。イエスのこの言葉を礼拝のどこに位置づけるか、これがなされないような礼拝論は、ただ神様のほうを向いているだけです。

隣人に対して感謝しない。私たちはどれだけこの世からサポートされ、どれだけノン・クリスチャンから助けられているか。あるいはノン・クリスチャンの夫や妻から支えられているか。それを全然考えないで「神様、感謝します」と言って、ただ神様だけに感謝すればいいなんて、とんでもないことです。聖書はほとんどが隣人との問題です。

これからの伝道

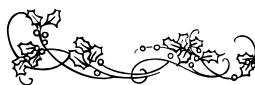
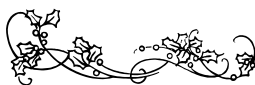
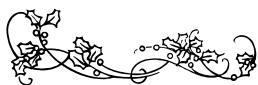
キリスト教伝道二千年の歴史の中で、なぜあのような罪を犯してきたのかということの根本的な「なぜ」を私は今問うてきました。ぜひ皆さんにも考えてほしいのです。そして私はあえて言いたい。そこからわれわれの伝道の姿勢を大きく転換しなくてはならないのではないかと。

従来 of 伝道の姿勢は、「あなたはキリスト教を信じないと救われませんよ」というものでした。もちろんニュアンスの違いはあるにしても、「自分の教義を守り、信じないやつは救われません」などという教会さえも出てきました。そして、最後の裁きで彼らを地獄に引き渡すことに対しては、ほとんどの教会は躊躇していません。それがキリスト再臨におけるキリストと教会の勝利であると考えている人さえもいます。ちょうどあのミケランジェロの「最後の審判」的なイメージ。イエス様が降りてきて、空手チョップをやるような格好でやっちゃう。「ざま

あみろ」というようなことまでわれわれが最後の観念に持っているとするならば、それはとんでもない間違いです。ミケランジェロの画は、画としては素晴らしいですけども、あの画がキリスト教だと思ったら大間違いです。本来キリスト教伝道は「あなたはキリスト教を信じないと救われませんよ」と言うのではなくて、「あなたも神の無条件の恵みの中に入れられており、救われていることを信じてください」と言うのが伝道のモチーフでなければならぬと思います。「大地がすべての人を支え、太陽が良い人の上にも悪い人の上にも与えられているように、あなたも神の恵みの大地に支えられ、恵みの太陽の下にあることを信じてほしい。たとえ信じていなくても、あなたがその大地の上にいることには変わりないのです」ということです。これが福音を福音として伝えるということではないでしょうか？ すべての人を、神の恵みに支えられ、救われた人として認識していくことが福音伝道の出発でなくてはならないと思います。この福音認識からは、かつてのミッションの歴史のように信じない者を殺し、差別しても構わないというような思想は生まれてこないはずで

このように共に神の恵みの大地の上にあるという認識。すべての人もすべての宗教も、すべて神の恵みの上にあるという認識。地球、神の恵みの上に皆共に相乗りしているのです。それをごちゃ混ぜに一つにしてしまうのではなくて、ブラジルではブラジルの文化をサラダ文化と言いますが、一つの皿の上にキュウリはキュウリ、キャベツはキャベツ、トマトはトマトとそれぞれに載っている。決してミックスしてミキサーにかけてサラダとは言わない。アメリカは残念ながら、わーっとミックスしてしまって、いわゆる WASP (ホワイト・アングロサクソン・プロテスタント) というものに同一化してしまおうとする。これがアメリカの文化で、非常に危険です。ブラジルはみんな一緒になって共に生きよう。それぞれの特徴をみんな大事にして生きようではないかという文化です。小泉さんではないけれど、人間いろいろ。一人ひとりがお皿の上で、トマト、キュウリ皆別々にそれぞれの個性を生かしているように、みんな自分を生かしながら共に生きようということです。

このように自分を取り戻そうという意味において、私は個人誌を『バベル』と名づけたのです。バベルというのは、あの塔を建てるためにみんな一緒になって一つの言葉、一つの考え方にされてしまった。強引にそうされてしまった。ところが神様の罰によってそれが崩れてみんなそれぞれが自分の言葉を取り戻していったということ。これがバベルです。だから私の『バベル』は自分の言葉で語ろうということなのです。自分の言葉を取り戻そうということ。朝鮮の人もみんな日本語に統一されようとした。私は台湾で生まれて台湾で育ちましたけれども、台湾の人もまさに日本語で統一されようとしていた。しかし日本が負けることによって、みんな自分の言葉を取り戻していった。これがバベルなのです。だから『バベル』は、みんな自分が自分の言葉を取り戻そうという運動だと思っていただきたい。私はそう信じて私なりに一生懸命書いているのです。



社会委員会からのお知らせ

10月の社会委員会の学習会は、10月3日(日)礼拝後に開きます。パレスチナ問題について学ぶ予定です。講師は岡田剛士さん(パレスチナ行動委員会・派兵チェック編集委員)